



日口交流

発行: 特定非営利活動法人日口交流協会

E-mail: nichiro@nichiro.org

Home Page: <http://www.nichiro.org>

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14

麻布台マンション401号

Tel: 03 (5563) 0626 Fax: 03 (5563) 0752



講演会『ウクライナ戦争後のロシアエネルギー戦略』を開催

6月11日に掲題の講演会を当交流協会主催で開催し、エネルギー問題の専門家、ポスト石油戦略研究所の大場紀章代表と橋本昌志主任研究員に講演していただきました(参加者は23名、港区立生涯学習センター)。ウクライナとロシアをめぐるエネルギー問題の経緯、また現下の戦争をめぐってロシアから世界へのエネルギー輸出の変化がどのように影響したか、BRICsプラス諸国の存在感など解説していただき、さらに活発な質疑応答がありました。終了後には別会場Cafeにて、懇親会を行って交流を深める機会となりました(参加者は15名)。講演会、参加者の感想を紹介します。



損したか、これらを正確に知っておく事は大切だと実感した。社会の変化について、その背景が分かっていたら、ある事実に対して妥当な解釈の幅を自分で予測できるだろう。昨今、巷に溢れるフェイクニュース対策としても重要なはずだ。

また、講演会後の質問タイムも良かった。自分とは違う視点は大変興味深い。ロシアが水素エネルギー発展を国家として支援している事は全く知らなかった。ガスパイプラインは中低圧なら水素も運べるようだが、パイプライン網が発達した欧州・ロシアの未来における水素の価値について考えて見るのも面白そうだ。戦争や制裁で分断されつつも、必要不可欠なロシアのエネルギーについて様々な視点から理解を深めていこうと思う。

今回はただ野次馬的に参加してみたのだが、自分でもロシアについての本を読んでみるなど良い学びのきっかけとなった。日向寺先生に誘われるまで全く知らなかったが、自分にとって大変価値ある機会だったと思う。

(中央大学法学部4年 白川史人)

私は大学の先生の勧めで今回の日露交流会に参加させていただいたのですが、ウクライナ戦争後のロシアエネルギー戦略についての話が興味深く、とても興味を惹かれる内容だった。脱炭素時代を世界が目指す中でも、やはりロシアのエネルギーなしでは経済社会は回らないので早くまた日本とロシアの交流が増えることを祈る。また、交流会の中で様々な経歴を持つ方々とお会いできたのは、これから社会人になる大学生として、とても新鮮な体験であった。参加する前までは大学生だから相手にされることはないだろうと予想していたのだが、いざ参加してみると周りの皆様が積極的に話しかけてくれたので、とても助けになった。今後もこのような講演があればぜひ参加させていただきたい。

(中央大学法学部3年 池田泰和)

お知らせ

●ロシア語の泉 (7)

日時: 2023年7月2日, 16日, 8月13日 (日) 13:30~16:00

講師: スニトコ・タチヤナ

会費: 会員7,000円、一般8,000円

会場: 田町「リーブラ」又は新橋「ばるーん」

●マトリョーシカ絵付け教室

日時: 2023年7月29日 (土) 13:30~15:30

場所: 田町「リーブラ」造形表現室

費用: 3,000円 (1セット教材費込み)

講師: 菅野エレナ

●ロシア料理講習会

日時: 2023年7月29日 (土) 9:30~13:00

講師: マイヤ・ノイ

場所: 田町「リーブラ」料理室

会費: 2500円

●イワン・クパーラ祭

日時: 2023年8月5日 (土) 11:00~15:00 (予定)

場所: 日影沢キャンプ場 (予定)

●ロシア語教室生徒募集中!

水曜初級1A-1 (19:00~20:00) 1A-2 (20:05~21:05)

土曜上級 (10:00~11:30) 月曜準中級 (18:00~19:00)

*見学もできますが変更の場合もありますので前もって事務局までご連絡ください。プライベートレッスンもあります。

お申込み、問合せ: NPO日口交流協会事務局

Tel: 03-5563-0626 E-Mail: nichiro@nichiro.org

*「日口交流」8月はお休みいたします。

お願い

NPO日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円からいくらかでも結構です。森田哲行氏、アジズ・ラヒモフ氏にご協力いただきました。ありがとうございます。

振込先: 郵便口座00160-9-66486、加入者名: 日口交流協会
連絡先: 日口交流協会事務局 E-Mail: nichiro@nichiro.org
Tel: 03-5563-0626 Fax: 03-5563-0752 *なお、お振込みの際に、寄付であることが分かるようにお名前の前に「01」とお入れください。よろしくお願ひ致します。



和食クッキングin田町リーブラ

安部 花子

6月10日、田町リーブラでの和食料理教室に参加しました安部と申します。今回はロシア大使館にて勤務されているロシア人ご夫婦の発案により実現した和食料理教室の企画です！講師は



もちろん、我らが小野田正子先生。今回も、初夏の季節にピッタリな爽やかなメニューをご考案いただきました。

今回の献立は、梅だし夏野菜おひたし・鮭のおむすび・鶏肉の塩麴焼きの三品。おひたしに使用する野菜は、ミニトマト・アスパラ・ナス・みょうがです。梅やみょうが、麴など、一見すると外国人の方にとっては苦手なイメージもある攻めた献立に驚きましたが、和食を味わい学ぶ上で欠かせないこれらの食材を使って、誰が食べても美味しくいただけるお料理を完成させることができました。

それぞれ4~6人のグループに分かれて5つのキッチンテーブルに付き、調理開始。今回は発案者のご夫婦と同じ班です。実はご夫婦と私は協会主催の茶道教室や浴衣の着付け教室にて何度も一緒にさせていただいた「イツメン」。お互い日本語・ロシア語があまり話せないもののたくさんの思い出を作ってきた仲間なので、久しぶりにお会いできてとても嬉しかったです。幸いロシア語が堪能な日本人参加者の方がいらして、その方に通訳してもらいながら、楽しく調理を進めることができました。

料理教室が終わったあと、日本人参加者の方々とカフェで感想戦をしていたのですが、皆さん口々におっしゃるのは、「生のロシア語に触れられる、こんなに貴重な機会はない」ということ。

今回の料理教室に参加されていた日本人の方にはロシア語学習者も多くいらしたのですが、ロシアへの留学が難しくなってしまった昨今、普段ロシア語教室で触れる文章とは異なる生きたロシア語に触れられるのは、学習モチベーションが非常に上がるとおっしゃっていました。

また、こういった交流イベントは、ロシア語を学習する日本人だけでなく、日本語を学習するロシア人にとっても、生きた日本語に触れられる良い機会なのかもしれません。というのも料理教室の最中、「これは日本語でなんというのですか？」と質問されることが何度もありました。そして母国語であるはずなのに質問されてもすぐに答えられない(笑)。夏野菜のおひたしをすくって小鉢の中に置く行為は、「お皿につぐ」？いや、「つぐ」は飲み物っぽいやニュアンスだな。「お皿に盛る」？いや、そこまでかさのあるものではない気がする。改めて質問されるとドンピシャな日本語がパッと出てこず、日本人参加者どうして頭を抱えながらなんとか説明しました。こういったジレンマも日常生活ではなかなか味わうことができない貴重な機会です。

ロシア人に限らず、日本や日本語に興味を持ってくださる外国人の方と接していると、自分の日本語は正しいのか？正しい作法が身についているか？などと、自分が持っている日本人としての知識や教養に意識が向きます。異なる文化やバックボーンを持つ人たちとかかわることで、かえって自国の文化をもっと勉強したいと思うようになるのはなんだか不思議な心境です。せめておむすびくらいはきれいに作れるようになりたいな、と両手にびっしりとこびりついた米粒をつまみ食いしながら誓ったのでした。

国際放送史研究の戯言No023

ロシアのトイレは朝顔の位置が高い

島田 顕

ロシアで初めて用を足したのは、忘れもしない1992年の秋、スペインへの2週間の旅行の往きの便（イベリア航空）で、給油のために一時間ほどシェレメチエボ空港に立ち寄った時のことだった。トランジットでもないのに空港の外に出ることはできず、唯々飛行機に乗るのを待っていた。空港のトイレはまあまあきれいに清掃されていたのだが、朝顔の位置が高いことに驚かされた。つま先立ちをしないと用を足せないのだ。そのとき、ロシア人はどんだけ足が長いんだ、と思った。もちろん子供用の朝顔もあったが、なんとなくそこで用を足すのは、憚られた。子供用でするのは、子供に見られてしまうようで、恥ずかしかったのだ。

ロシアの声放送に就職したのは、職場のトイレを使うようになった。職場トイレは煙草を吸う一服の場でもあったので、いつも煙が充満し、煙草くさかった。日本語課オフィスがある8階トイレの朝顔は、何故か常に使用禁止となっていた。だから個室の洋式便器で小もする。小をするときは別に問題なかったが、大をするときに問題があった。便座がないのである。先輩に聞くと、便座はすぐ盗まれてしまうので、便座自体をはじめから取り外してあるとのことだった。便座がなければどのように用を足すのか。そこでいろいろ思案して、和式便器のように、洋式便器のふちに足をかけて、しゃがんでするというをやってみた。しばらくそうやって用を足していたら、あることに気が付いた。トイ

レにはトイレットペーパーがなく（トイレットペーパーも盗まれてしまうので常備されていなかった）、代わりに古新聞紙が小さく切られてホルダーに入っていた（昔の便所紙のように）。それで尻をふき、ふいた後は使用済みの紙を個室の屑籠に捨てることになっていた。古新聞紙は便器に流してしまうと詰まってしまうからだ。そこで、ホルダーに入っている尻ふき用の紙を便器のふちにびっしりと並べて、そこに座るというやり方を思いついた。古新聞で尻をふくと痛めてしまうので、自宅からトイレットペーパーを持っていか、ティッシュペーパーでふくようにした。いずれにせよ、トイレでこんな苦労するとは夢にも思わなかったのである。

日本ではもはや当たり前前のウォシュレットも、ロシアのトイレにはない。定宿のイズマイロボ・ホテルの部屋のトイレにもなかった。一度だけ、モスクワ駐在の日本人商社マンのお宅に招かれたことがあったが、トイレにウォシュレットがあつてうらやましかったことを記憶している。今ではロシアに行くときは、携帯用のウォシュレットを持っていくようにしている。

トイレといえば、シベリア鉄道で旅行したときに、沿線の駅で「ぼっとん」便所に出くわしたことがあった。懐かしさとともに、ロシアにも「ぼっとん」があるのかと驚いたものだった。あの「ぼっとん」は、今もあのまま残されているのだろうか。また尋ねてみたいものである。

《モスクワ・アラカルト76》

「ある馬の物語」ついに上演へ！

日向寺 康雄

6月21日から7月9日まで、世田谷パブリックシアターで『ある馬の物語』が上演されている。この作品は、文豪トルストイの小説を舞台化したもので、主催者によれば「人間という愚かな生き物と思考する聡明な馬とを対比させ、人間のあくなき所有欲に焦点をあてながら『この世に生を受けて生きる意味とは？』という普遍的なテーマを、詩情豊かにそしてストイックに問いかける作品だ」との事だ。

初演は旧ソ連時代の1975年で、モスクワの演出家M. ロゾフスキイが脚色し、素晴らしい音楽劇に仕立て上げた。もともと2020年夏に上演予定だったがコロナウイルス蔓延のため延期となり、ようやく今年になって演出（白井晃）も俳優陣も20年当時のまま実現の運びとなった。私も昨年春からコーディネイターとして参加しているが、コロナ禍は去りつつあるものの、ウクライナでロシア軍による軍事作戦が始まったことで、舞台を巡る状況は一変、複雑でより困難なものとなった。何しろ、ロシア側との連絡はスムーズにとれず、資料のやり取りもできず送金もままならない。そんな時一肌脱いでくれたのが、これまでNHKの特別番組制作などで現地コーディネイターとして活躍してきたナターシャさんだ。彼女は直接モスクワの劇場に足を運びロゾフスキイ夫妻と会って、信頼の絆を深めてくれた。こうした事は、どんなに技術が進んでも、やはり人間力が勝負だ。

ロゾフスキイは、公然とプーチン政権を批判してはいないが、これまでの活動や発言、スターリンによる大粛清時代に幼少期を送った過去、ユダヤ系である事などを考えれば、現在置かれてい



る立場は非常に微妙だ。『非友好国』とされ、自国サミットにウクライナ大統領を招いた日本との交流のような「目立つ事」はできればたくないのが本音だろう。これは「周りの空気を読んで」安全策をとる日本社会でも同じで、その点「文化交流は政治とは別」との立場を貫いた世田谷パブリックシアター、特に芸術監督の白井氏、プロデューサーの浅田氏の人間の見識の高さと肝っ玉の据わった態度は実に見事だった。

私は岡田嘉子先生との深い御縁から「日口演劇人交流を絶やしてはならず」という、先生の命を懸けた遺言を受け継ぐ事が自分の使命と考えているが、今回この時期に、他でもない非暴力による平和探究を訴えたトルストイの作品を日口演劇人の協力により形にできたことは本当に嬉しい。ロゾフスキイは次のようなメッセージを寄せてくれた-

「『ある馬の物語』上演にあたり、私は、いかなる形による暴力にも抗い、それを受け入れないトルストイ及びトルストイズムの偉大さについて、心の高まりを感じながら、思考を巡らせています。悪魔が、この地上でどんな忌まわしいものを創り出したとしても、神は、それがモーゼであれ、キリストであれ仏陀であっても、一人の人間を通して自らを明らかにすることはありません。神は、最高の正義や調和、そして自由を求めめる普遍的探究を通して、我々すべてに、そして人類全体に明らかにされるのです。まさに今、私達は一緒になって、基盤となる価値観をしっかりと守り通すことができると信じています。トルストイによれば、それらがなければ人生は空虚で無意味なものになってしまうのです。」

(元モスクワ放送チーフアナ、現中大&早大非常勤講師)

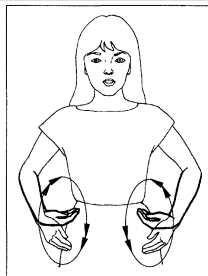
ロシアの手話

キタヤマ 忍

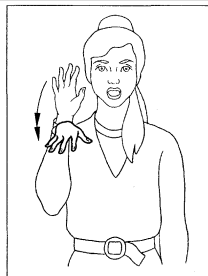
今年もライラックの甘く爽やかな香りが、約30年前のモスクワでの出来事を蘇らせた。ロシアになって6年目、地下鉄ヴェリャーエヴァ駅。5月なのに秋のような夕空、町の活気に居心地の悪さを感じながらトランバイを待っていた。15才くらいの少年たちが10人もいたろうか、車道にはみ出し大声でふざけながら目の前を通り過ぎて行く。一人が足を止め、どうしたのか？と尋ねてきた。気持ちが浮かない、なぜ？そんな会話をしながら、その少年が手話で話していることに気がついた。彼は私の口を読み身振りでも返してくる。あまりに自然で違和感を全く感じなかった。

少し離れた仲間達が彼の視界に入るように大きな身振り、手話や声で「あっちへ行くよ！」と呼んだ。一緒に来ないかの誘いを丁重に断ると、彼は停留所のライラックを一輪折って私にくれた。口の端を指で上げて「笑って」というと手を振って、トランバイに乗る私を見送ってくれた。

ロシアで感銘を受けた事の一つが手話だ。手話話者の方達がおしゃべりをしながら散歩をしたり買い物をしたり、ある時は大盛り上がりで笑い転がっているのを見かけていた。当時は、少なくとも故郷札幌では意識をしなければ接点もなく、少し暗いイメージ



здравствуйте



до свидания

だったかもしれない。

ロシアの手話話者が私の世界を変えた。明るく、ひそやかなモノでも「特別」でもなくなった。言葉が目に見えているだけなのだ。

ロシアの手話教育は日本よりも20年ほど早い1860年に始まった。ロシア手話はロシア語よりも単語の順序など文法が厳しいようだ。フランス手話の系統でオーストリア手話の言葉が多く用いられている。ロシア、ウクライナ、モルドバ、ブルガリア、イスラエルで約12万人以上が使っているが、方言や教育機関不足による地域的ばらつきがある。今はYouTubeでPЖЯと検索すると初歩から学習でき、共通語の普及に貢献している。アメリカ手話とロシア手話といったバイリンガルも多いようで、対応した教本もあるがインターネットが大きな役割を担っている。

実は日本でもロシアの手話教育が研究されていて、宮井清香氏のソ連時代の「もう一人の奇跡の人 オリガ・I・スコロホードワの生涯」もオススメしたい。

あの日の少年達も少しはきっと手話ができるようになっていて、今も静かに賑やかに会話していると期待し思い浮かべている。
(ビデオグラファー)

ウズベキスタン便りーフェルガナよりー

後藤 三加子

フェルガナ市は、ウズベキスタン共和国東部の人口21万4千人の都市。シルダリア川上流とカラテギン（フェルガナ）山地に挟まれた、フェルガナ盆地の南端に位置し、タジキスタン、キルギスと国境を接する。（Wikipediaより）

この町で暮らして1ヶ月余りが過ぎた。朝は賑やかな鳥の音が目覚ましとなり、窓を開けて空を見上げると四、五十羽のツバメが右に左にと飛び交っている。そして、ときにはツバメが思わぬプレゼントを落としていくことがある。州の中心ではあるが、大きな街路樹が並ぶ緑豊かな町である。

職場までは毎朝、散歩のつもりで20分ほど掛けて歩いている。家を出るとすぐに片側2車線ほどの通りに出る。通りには、薬局、お菓子屋、酒屋、ミニマーケット、ウズベクレストラン、そしてスーパーマーケットなどがあり、毎日の生活に不自由さを感じることはない。開店前のお店の床を掃除する人や、店の前を掃き掃除する人、道路脇の草刈りをする人などによって町の中がきれいに整えられている。レストランの前では、肉の串焼き（シャシリック）のための炭の用意をしている店員さんが忙しく働いたり、パイやパン生地の中に野菜や肉などを入れたもの（サムサ）を売ろうと焼き釜の前で店番をしたりしている店員さんを見かける。目が合ったらこちらから「アッサラームアレイクム。」と声を掛けると、にっこり笑って「アッサラーム…」と返してくれる。

大通りを渡り、アパートが立ち並ぶ住宅街の小道に入る。大きな楓の街路樹のお陰で、日差しは遮られ、涼しい中を歩くことができる。鳥たちの声がますます近くに聞こえる。軽トラックに野

菜や果物などの入った木箱を積んだ移動販売車がアパートの入り口に横付けされ、買い物をしている人がいる。歩道脇には、キャンディーやガムなどを並べた小さな露店があり、おばあさんが編み物を手に店番をしている。ベビーカーを押し、もう一人の子供と話をしながら歩く親子連れ、スナック菓子の袋を手に歩道を右に左に歩いたり、車止めの段差を見つけては上ったり下ったりと忙しく動き回る弟を見守りながら歩く姉の姿なども見られる。

少し歩くと幼稚園の前に出た。車やオートバイ、自転車が並び、次から次と子供達が両親あるいは、祖父母、兄弟などに見送られて園内に入って行く。塀が高く扉一枚が開いているだけなので中を見ることはできないが、園内からはたくさんの子供達が遊ぶ楽しげな声が響いてくる。高齢化、少子化の進む日本ではあまり見ることのできない景色なのではと思う。

フェルガナの町を歩いていて気が付いたことがある。それは、学生と思われる若い女性が、長袖姿で頭にスカーフをきっちりと巻いている姿を多く見かけるようになったことである。以前、訪れたときには見かけることはなかった様に思う。知人の話によると、コロナ禍を経てウズベクの人々のイスラム教への信仰がより深くなっているとのことである。スカーフもその一つではあるが、1日5回の祈りを大切に、男性はひげを生やす人が増えたとも言う。

近代化が急速に進むウズベキスタンではあるが、まだまだ変わらないものも残されている。新しい発見や変化を感じながら、フェルガナでの生活を楽しんでいければと考えている。

（フェルガナ州 教育アドバイザー）

野口芳雄氏/陽一氏の思いで(2)

畔上 明

アンドレイ・タルコフスキー監督「惑星ソラリス」は1972年にカンヌ映画祭審査員特別賞を受賞した話題作でもあったのですが、日本での上映が1977年と先のこととなってしまったにもかかわらず「日本海映画」社内の試写室で早々と目にすることが出来たのは幸いでした。新橋の保税試写室で、輸入することとなるかどうか決まる以前の映画を観ることが出来たのも恵まれた環境でのアルバイトであることを実感しました。

愛車で通勤する野口陽一常務は、私の住む中野に詳しいとのこと、帰り道を時折車で送って下さることもありました。車中の話題としては、外交官の父親が滞在していたオデッサで生まれたこと、日ソ国交回復後1967年に父親は外務省を退官して「日本海貿易」株式会社を設立、その映画部が独立した「日本海映画」株式会社はソヴェクスポーツフィルム(全ソ映画輸出入公団)と独占契約を結んでいるためソ連から輸入する映画は全て（日本ヘラルド映画配給もAIGも東和配給も）「日本海映画」を経由して国内に入ってくること、モスクワには外務省出身の若手スタッフ松沢一直氏が滞在していること、秋の映画祭には映画好きのバイトくん達が集まるのでひと仕事終わったら山中湖畔でバーベキューを予定、よければその時も車で送迎するよ、等と親しみのこもったやりとりでした。そして、常務の優しいお誘いに甘んじてのドライブ、湖畔のバンガローで映画会社の方々とおつらいだ一泊旅行は忘れ難いものとなりました。

ある日のこと、大木須田町ビルの階を一つ隔てた親会社「日本海貿易」株式会社に入社試験が始まるので行ってみたいかどうかと野口常務



ソビエト大使館の依頼により「日本海映画」が開催した映画祭のパンフレット、発行映画ニュースなど

に促され、面接を受けてみることとなったのです。アルバイト先では、ジーンズ姿にサンダル履きという格好だったのですが、奈良のIT大学から試験を受けに来ていたMくんが、私を見て笑いをこらえる様に「ネクタイとジャケット、革靴を貸してあげるから、いくら何でもその姿で面接するわけにはいかないだろう」と気遣いを示してくれます。Mくんの厚意に甘え順番が回ってくる前に借物のリクルートスーツに着替え、どうにか面接室に入ってしまったのでした。

後日、社長秘書のOさんから聞かされたのですが、面接の最中私は頻りに「日本海映画に入りたかったのであって貿易に入りたかった訳

ではありません」と失礼なことを口にしていただけと伝えられ、すっかり忘れてしまっていたこともあり赤面するばかりでした。

「日本海貿易」の入社内定が届き、「日本海映画」の野口陽一常務にお礼を申し上げた時こは、ソ連貿易の北洋材の取引が日本一であること、ボーナスが年間十ヶ月も出る恵まれた会社に就職出来て良かったのではないかと励まされました。ソ連との貿易は大手商社にとっては直接取引が出来ない時代が続く、多くの大手商社は友好商社なるダミー会社をつくっていたこと、「日本海貿易」もご多分に漏れず「丸紅」のダミーから出発したことも教えられたのでした。